

皆さん！と言いましても、約 200 名 入るこの会場で、ワタクシも入れて 5 人だけが集まって、これから聖書のメッセージを共に考えていきたいと思えます。

この YouTube をご覧の皆様にも、このチャンネルに合わせてくださったことを心から感謝いたします。

先日、ネットでエッセイのようなものを読みました。

1 人の男性がローカル線の電車に乗って、窓からずっと景色を見て、「すごい！素晴らしい！なんと素晴らしいんだ！」思わず口をついて感嘆の声を上げているので、隣で本を読んでいた人が「何がそんなにスゴイのか？」と窓の外を見たら、線路沿いの家がギチギチに建っているというか、スラムというか何というか、全然キレイなことない。歩道を見ると、ゴミが散乱していて汚い。

天候もどんより曇り空で、なんか重苦しい。息苦しい。気分爽快にならない。

だけど「素晴らしい！素晴らしい！」「これのどこが素晴らしいんですか？」

「私は 30 年間 盲目でした。でも角膜移植を受けて、今日包帯を取ったんです。生まれて初めて、肉眼でこの世界を見ました。世界にあるものが素晴らしいということより、私自身が今見えているということが、あまりにも素晴らしくて 嬉しくて 感動で、喜びが湧いて来てたまらないんですよ。」

私たちは自分が見えていることに、そんなに「素晴らしい！素晴らしい！」と言わないと思うんですが、見えたり・聞こえたり・味がしたり・良い香りがしたり。今 私たちが持っているものを一旦奪われて、1 週間ほど過ごした後に元に戻してもらったら、全然違った感覚になるんじゃないかなあ。

“人生とは奇跡であって当たり前ではない”ということに気づいたら、人生の見え方・考え方が随分変わってくるのではないかと思います。

今日は、「人生は当たり前ではないんだ」ということを、身に染みて経験したパウロという人物の手紙から、ご一緒に考えたいと思えます。

I テモテ 1:11-12

11. 祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、そうなのであって、私はその福音を委ねられたのです。
12. 私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださったからです。

私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。強くしてくださる主。前提は、本質である私は弱いけれど、また、私には心を挫くようなものが身の回りにいっぱいあるけれど、その弱い私を神が強くしてくださる。元々強いのではなく、本来は弱いんだけど、神の力で強くしてもらえる。それをここで語っているんですね。

この強さ・弱さを考えたとき、私の愛読書の 1 つに、スイスのクリスチャンドクターのポール・トゥルニエ（1898-1986）が書いた『強い人と弱い人』があって、折りに触れてこの本を読んでいます。彼は政治家・オリンピックの選手・有名人・芸能人・文学者・著名人から無名の人に至るまで、何千人もの人々のカウンセリングをしました。

彼に話を聞いてもらいたい。カウンセリングしてもらいたい。ヨーロッパ中からスイスの彼のところに来るんです。その結果、彼は人間に対して1つの結論を出しました。“特別な人なんかいない。”

「一般的に強い人と弱い人があって、タフでくじけない強い人がいるかと思えば、ちょっとしたことでしおしおの葉・へなへなと崩れてしまう人がいて、人間には元々強い人と弱い人がいるのではないかと思っている。が、実はそうじゃないんですよ。

強い人は、自分の弱さが他の人にばれないように、強いフリをしているに過ぎないのです。自分の中にある臆病・傷・過去・弱さを悟られないように、強い態度・振る舞い・大きな声・暴力的・怖がらせたりする。それによって、自分の中にも怯えているものがある、ということを知られないように演出している人が強い人なんです。

弱い人とは、強い人は演出にしか過ぎないんだ、ということを見破ることが出来ず、『世の中には本当に強い人がいるんだな。それに比べて、この私は弱々しいなあ』と落ち込んでいる人です。

つまり、世の中には弱い人しかない。それを知られないように演出している人と、そのことを見破れないで、弱いのは自分だけだと思い込んでいる弱い人。この2つしかないのであって、本質において全ての人は弱い。弱い者です。」

ところが、[私を強くしてください](#)と書いてあるように、パウロが今経験している強さは、自分の中にある弱さを知られないように演出している強さではなく、弱さを十分認め受け入れた上で、その弱さの中からこんこんと湧いて来る、神によって与えられる強さのことを言っているのです。

神によって強められる強さとは、どんなものなのでしょう？

どうしたら、それを得ることが出来るのでしょうか？

3つのポイントで考えたいと思います。

1. 神を正確に知る。

聖書が言う神様は私たちの作者。あなたの造り主。あなたの魂の親である方。この世界の第一原因者。この方は[祝福に満ちた神](#)。良いことをなさる方。最善以外のことをしない方。良い方。この良い方が私の人生に、いつもいつも途切れることなく、良き働きかけをし続けてくださった。

アメリカのエレナ・ポーターが書いた小説『少女パレアナ』。私も大昔によく読んだのですが、これが発売された時、全米で数年間ずーっとベストセラー。ぶっちぎりのベストセラー。ぜひ一読をお勧めしたい本の1つです。

パレアナは幼くして両親が死んでしまう非常に不幸な少女で、おじさんに引き取られました。彼女が親に教えられていたことは、“自分に起こっていることは、何か良いことが起こっているに違いないと考え直す”という遊び。自分の目には良いことに見えなくても、「いや。これは、きっと良いことに繋がっているに違いない」と考え直すゲームというか。

引き取られたおじさんの家には鏡がない。女の子だから、やっぱり鏡見たいじゃない。だけど1枚もない。「え？」と思うけど、「そうだ！これは、私の大嫌いなソバカスを見ずにすむんだ。ラッキー！」考えを切り替える。

また、彼女にあてがわれた部屋は屋根裏部屋で、ついこの間まで物置部屋みたいな、殺風景で絵が1枚も掛かってない。だけど、1枚だけ窓があって、そこから見える景色を絵に見立てるんですね。人が描いた絵は全然変わらないけど、窓から見える景色は春夏秋冬、朝昼晩、色彩が変わって、刻一刻と変化していく絵。「そんな絵が私の部屋に掛かってるんだ。感謝！」と言うんですね。

実は、彼女には嫌でイヤでたまらないことが1つありました。

“毎週月曜日は洗濯の日”とおじさんに決められて、1週間のたまりにたまった洗濯を彼女がやる。電気洗濯機とか全自動とか一槽式とかちゃうんですよ。こないして（洗濯板で）洗うやつやん。

冬も月曜日はやって来る。手がかじかんで、辛くてたまらない。「ああ、月曜日嫌い。イヤだなあ。」でも、この嫌なことは、何か良いことに繋がっているに違いないと考え直すゲーム。

ある日、彼女はハタと気が付いたんですね。「私は月曜日大嫌い。だけど、今日の月曜日は、次にやって来る月曜日からは1番遠い。」月曜日が来るたびに「次の月曜日から1番遠いんだ。これは素晴らしい！」と言い聞かせて取り組んで行く。

そういう話が、文庫本ですが、最初から最後まで。一見嫌なこと・辛いこと・面白くないことの中に、良いこと・幸いなこと・嬉しいことを見出して行く、というのが延々と続くんです。

元気になります！これは。教えられますね。

それはパレアナの人生観、そして、彼女を主人公にしている この物語の著者の人生観ですよ。

著者の人生観の土台にあるのは“一見イヤに見えることの中にも、絶対に良いことが含まれている。”なぜなら、この世界を支配しているのは**祝福に満ちた神**だから。

神様は祝福に満ちているので良い方である。良い方からは良いことしか出て来ない。

良い方から悪は出て来ない。神様は最善以外のことを私になさらない。

皆さんはどんな人生観で生きておられるでしょうか？

ある方は無神論。「神なんか無い！人生とは人間と人間の競い合いの場だ！」

ある方は「神はいるけど、それはバチを与える神。悪いことをしたら懲らしめる神。たたる神。因果応報の神。私に呪いをかける神。」

しかし聖書は言います。神とは**祝福に満ちた神**。神は良い方。あなたを愛する神は良い方なんですよ。パウロが信じていたのは、単に自分を造っただけではなく、ご自分が造った作品に、何とか祝福を注ぐと日夜働いておられる神。

この人生観が、彼に弱さの中から立ち上がって行く力を与えたに違いないのです。

多くの迫害や問題や困難の中で、「待てよ。神様はピンチに見えるようなこの状況の中でも、絶対に祝福を備えておられるに違いない。」この信仰が彼を強くしているんですね。

これが、**強くしてくださる**という意味だと思います。

2. I テモテ 1:13-15

13. 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。

14. 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。

15. 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

パウロが以前はどんな人だったのか、自己紹介が書いてあります。

私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。最悪な者でした。

しかし神の最善は、私の最悪によっても何一つ影響を受けませんでした。それどころか、私の最低最悪に対して、神は最高最善の扱いをしてくださいました。これを恵みと言います。

良いことをしたから良いものをもらえる。これは報いです。

悪いことをしたから悪いことが起こった。これも報いでしょう。

でも、良いこと何にも出来ていない。いや、悪いことしか行わなかった。神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者だった。そんな者に対して、神は裁きではなく、あわれみを注いでくださった。

罪には罰が下るべきです。しかし神は、私の最悪に対して恵みを注いでくださった。

パウロは自分の最悪を見て弱くなって行くのではなく、最悪な者に対する神様の反応は恵みなのだ、ということが分かった時、最悪であればあるほど、恵みは私のために準備されていたのだと解釈し、その弱さから強められて行ったのです。

パリ-ダカール・ラリーをご存知ですか？車に関係ない・興味ない人は殆ど興味ないかもしれません。

家内は昔ジープに乗ってたんですよ。どこのジープ？スズキのジープ。そんなんあるんですか。

パリ-ダカール・ラリーは史上最も過酷なスポーツと言われています。出発点はフランスのパリ。

ゴールはアフリカ セネガルのダカール。パリからダカールまで1万2千キロ。

それを3週間かけてレースを続けるんですが、あまりにも過酷なので完走する車は半分以下。

だから、完走するだけで全員勝利者と言われる。

というのは、道の上を走るんじゃないんですよ。舗装されたアスファルトの上をブーンとスタジアムを走り抜けて行くって、そんなんじゃない。砂漠の中・道なき道・ぬかるみなど、非常に環境の悪い所を猛スピードで走って行く。途中に集落も救護施設も殆どないので、死者まで出てるんです。

ドライバー、亡くなってるんですよ。しかもアフリカ大陸のルートは、政治的不安定の所を通るからテロに遭う。レース中なのに、夜中休んでいる間にレースの自動車を盗まれるんですよ。誘拐されたり。

世界一過酷なモータースポーツと言われています。

これに、世界中の自動車メーカーが自信作を投入するんですが、優勝回数が多いのはぶっちぎりで日本ですよ。三菱のパジェロ。

なぜ世界中の自動車メーカーが、最高に整備された特別仕様のジープを投入するのか？

ここで完走したら、また優勝したら、そのメーカーの技術が、どんなレースで優勝するよりも立証されるからです。条件が過酷であればあるほど、環境が酷ければ酷いほど、それでも壊れなかった・潰れなかった・駄目にならなかった車って、なんとスゴイんだ！環境の酷さが、その車の素晴らしさを際立たせるんです。

パウロが言っているのはそういうことです。愛しやすい人を神が愛したら、神様の愛の偉大さが分からない。誰だって愛さずにはおれないような素晴らしい人格の人を愛するなら、神様の愛の素晴らしさが分からない。「だって、私でも愛せるもん」みたいな。

だけど、誰もが「コイツだけは受け入れたくない」と言うような、忌まわしいことをやらかして来た、愛される値打ちのない、どうにもならないこの私が神によって愛された。私のそのダメさ加減や醜い過去は、それでも変わらない神様の愛を、一層際立たせるために用いられているではないか。

人間のどんな最悪も、神の愛を打ち消すことは出来ない。人間のどんな罪も、神の愛を撤回させることは出来ない。神様は私たち人間と違って“お互いさまの愛”ではないから。

私たちは、私を愛してくれる人を愛し返します。私を憎む人を憎みます。相手が愛してくれたら、こちらにも愛を返します。お互いさまの愛ですよ。

しかし神様の愛は、私が神を愛したから愛する愛ではないんです。神が愛なので愛する愛なんです。人間の愛は“I love you. Because you love me./私はあなたを愛します。あなたが私を愛してくれるから。”でも、神様の愛は“I love you. Because God is love./神はあなたを愛しています。神は愛だから。” 私たちに依存しない愛です。私たちから影響を受けない愛で、神は愛してくださった。

パウロは反逆者のように迫害したと書いてありますが、誰を迫害したのか？クリスチャンですよ。パウロはクリスチャンになる前、自分よりも先にイエス・キリストを信じたクリスチャンたちを捕縛し・逮捕し・死に至らしめる事件に関わりました。もしかしたら、1人だけじゃないかもしれない。とんでもない事をやらせた人物ですが、「そのような私があわれみを受けました。」その時、立派な行いをして愛されたというのでは味わうことが出来ない、深い安心感と満たしがあったんですね。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』、読んだことありますか？めっちゃ長いし未完成。もうね、訳した人、偉い。修飾語だらけの長い長い文章。大学時代に何回も挫折して読んだのを覚えています。その中に、ゾシマというロシア正教の長老、牧師みたいな人が出て来ます。今はもう年老いて、髭をたくわえた仙人みたいな容貌のおじいさんだけど、何とも人格者で、傷ついている多くの魂を救済するために用いられた人です。

はじめ彼は軍人・将校・イケメン・金持ち・ロシア社交界の英雄で、将来が約束されている男でした。それで、多くの貴婦人たちがキャーキャー言いながら群がって来るけど関心ない。「関係ねえ。」ところが、ある貴婦人に一目惚れしたんです。彼女には婚約者がいました。自分は婚約中だということを、それとなくほのめかして何回も伝えるけど、ゾシマには入らない。というか、彼女の言い方がまどろっこしい。遠回しなんですね。それが当時のエチケットだったのか分かりませんが、ゾシマには入って行かない。

やがて、軍人なので、命令を受けて戦争に行きました。その間に彼女は結婚します。戦争が終わり、プロポーズしようと思ったら、彼女は人妻になっていた。「なめんなよ、お前！」という気持ちですよ。彼女と結婚できなかったことより、自分のプライドが傷ついて、「俺をオモチャにしたんか！」みたいな。いや、彼が勝手に舞い上がって、勝手に傷ついているだけなんですよ。

だけど、怒りが収まらない。彼女を傷つけたい。苦しめたい。どうしたらいいですか？彼女の夫を公衆の面前でメチャクチャに侮辱して、決闘することになったんです。銃で。「男なら一対一の果し合い、受けてみろ！」引くに引けない状況まで持って行って、銃で勝負。こっちは軍人だから圧倒的に有利です。彼女に夫の死を見せつけて、「俺を怒らせたなら、どんなことになるか分かったか！」みたいに。相手が決闘を受けたんですね。ゾシマは「明日、逃げるなよ」と捨て台詞を言って、家に帰りました。

高級将校に与えられている豪邸で、門番のような番兵がパッと敬礼します。

その時、気持ちは高揚・興奮しているし、彼女たちへの憎しみもあって、何の関係もないこの番兵を殴り倒したのです。何にも悪いことしてない。だけど、殴り倒されて地面にうずくまった彼は、すぐに姿勢を正して、もう1度パッと敬礼。

ゾシマはそのまま2階に上がって、数時間でも睡眠を取って、ベストコンディションで決闘に臨もうと寝るのですが、気が付くと朝になっていた。窓からは日光が差し込んで、小鳥のさえずりが聞こえて来て、ふと外を見ると、誰が手入れしたのか、美しい花がずーっとあって。

しかし、心の中にモヤモヤと引っかかっているものがある。「そうだ。昨晚、番兵を殴り倒したことだ。」何も悪いことしてない彼を、ただ虫の居所が悪いというか、カーツとして、問答無用で殴りつけた。彼はそんな私を殴り返すのではなく、ただ黙って暴力を受け、しかも目上の上級将校として敬意を表した。突然「俺は罪人だ…」と分かり始めたのです。すぐに番兵の所に行って「赦してくれ…。」

ゾシマの心の中で、どんな変化が起こっていったのか？昔 お兄さんから言われた言葉でした。「もし全ての人が自分は罪人だということが分かれば、この世界は楽園になる。」
「自分が罪人だと分かたら、なんで楽園に見えるん？」と置いていたけど、今それを経験した。私はわがままで独りよがり・勝手に傷つき・番兵を殴り倒し・新婚の彼女の夫を奪おうとしている。

そんな酷い奴に相応しいのは、呪いや酷い目に遭うことだ。なのに、朝起きたら暖かなベッドの中で、窓から美しい太陽の光が差し込み、小鳥のさえずりが聞こえ、花々に囲まれ、コーヒーが用意され、いい生活をしている。悪いことをしているのに、めちゃくちゃ良い生活を受けている。私は恵まれているじゃないか。

ドストエフスキーはここで何を言っているのか？番兵の中にキリストを見ているんです。この番兵は何も悪いことをしていない。むしろ、ゾシマを守るために徹夜で門番してくれている。夜中中立って、門番して、自分を守ってくれている。そんな人を殴りつけて傷つけたのに、その人は怒って殴り返すのではなく、黙ってその暴力を引き受けながら、敬礼を返して尊敬をやめない。

キリストは私たちを守るために寝ずの番をし、日々導いてくださった。
キリストは人間のわがままな罪から出て来たあらゆる暴力・暴言・罪・汚(けが)れ・咎(とが)を、十字架の上で、黙って全部引き受けてくださった。
悪を行った者に相応しいのは罰なのに、罪人の私に対して、神はイエス・キリストという救い主を与えてくださった。神は最悪に対して最善で応えてくださっている。そこに彼の喜びがありました。
“私は罪人だ”というところに焦点を絞って行くとガクツとなりますが、その私に神はキリストを送ってくださった。

I テモテ 1:15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」

誰のために来られたんですか？罪人のためです。

罪人をどうするためですか？裁くためですか？**罪人を救うために。私はその罪人のかしらです。**

もしキリストの十字架の救いがないなら、罪人であるのは恥です。

しかし、神は罪人にこそ用事がある。罪人のためにいのちを献げてくださった。

だから、罪人でない人にはキリストは関係ない方です。キリストのお目当ては罪人です。

自らの罪を悲しむ罪人を、どうしてキリストが放置できるでしょう。
罪人を救うために来てくださった方なのです。

自分自身の罪の経歴を思い返すとパウロは弱くなったけど、しかし、強ければ・正しければ・完璧であるならば、罪人のために死んでくださるというキリストのメッセージが他人事に終わっていたんですね。神は紛れもなく、私のために来てくださったということです。
これが、弱いのに強くされるという2番目の意味です。

3. 神は私がしでかした過去の大失敗ですら、宝に変えて行ってくださる。

恥が恥のまま いつまでも残されるのではなく、恥の経歴や過去を良いことに用いていただける。

I テモテ 1:16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。

こんなに酷いことをやらかした私を救われたのはなぜだろう？それは、今後、私よりもっと酷いことをやらかして、イエス・キリストを見上げる人が出て来た時、「私はあまりにも酷すぎるので、信じることもすら出来ない。信じて救っていただけるような価値はない」と引き返そうとする人に、「いやいや、前例があるぞ。昔 パウロという人物は人殺しだったのに、キリストの使徒になったんだぞ。」

旧約聖書から2人、新約聖書から1人、聖書全体で偉人のベスト3を選べと言うなら、私が選びたいのはモーセとダビデとパウロです。

旧約聖書のモーセ五書・聖書全体の土台を書いたモーセ。キリストがやがてその家系から出て来る、イスラエル黄金時代を築いた王ダビデ。新約聖書の大半を書いたパウロ。

モーセ・ダビデ・パウロ。すごい器ですね。この3人に共通しているのは人殺しです。モーセもダビデもパウロも人を殺(あや)めている。しかし彼らは、そのどん底の中で、神の恵みを頂いたんですね。

私の友人に漆芸家(しつげいか)の方がいます。漆芸家。うるしの器を漆芸と言いますね。

“失礼か”ではないですよ。失礼なヤツとか、そんなんじゃない。

まだ若いのですが、非常に名誉ある賞を次々に取っています。私は高松に行くと、この方の工房『漆工房オーリーブ』、そこに和室があって、寝泊まりさせていただくんです。

彼から聞いた話ですが、漆(うるし)は何に使われたかという、例えば、スズメバチの大きな巣が木にくっついてますね。大きいのに絶対ポチッと落ちないのは、接着しているのが漆なんですって。漆は時間が経てば経つほど、いよいよ接着力が増していくという天然のアロンアルファ。

戦国時代に最も価値があったのは何かという、人の命ではありません。お米でも土地でもない。意外ですよ。瀬戸物です。茶器。お茶を点てる時の器。名人が作った物は、国と交換できるくらいだったんです。織田信長は本能寺で、亡くなる直前まで何をしていたのか？寺の境内で、茶器並べて磨いていた。伝承によると。

ところが、瀬戸物なので、ウツカリ手を滑らせて割ってしまうことがある。何百億円にも匹敵するような、大阪府全体と交換してもいいような茶器。それが割れてしまったときにどうするか。ポイとゴミ箱直行。ではなくて、“金継ぎ(きんつぎ)”ということをするんです。

割れた物を漆で接着するのですが、割れ目から滲み出て来たところに金粉をまぶす。その後きれいに拭き取ったら、傷口に金が模様となって描かれるのです。この偶発性による美が何とも言えない。人が定規で描いた線じゃなく、割れてしまった微妙なラインが金の筋になっている。金で継ぐので金継ぎ。銀で継いだら銀継ぎ。白金で継いだら白金継ぎと言うそうです。

そして、金継ぎになった物は、1度も割れてない物よりもはるかに値打ちが上がるんです。無傷の物は最高だと思ふかもしれませんが、骨董品の世界では、壊れた後で偉大な修理を受けた物・その傷口が残っている物の方が値打ちがある。1度も罪を犯すことがない人生を送れたらどんなに良いか。そう思うけど、神様の栄光は、罪人が赦されて立ち上がる場所にあるんです。

昔 マウイ島に行って、クリスチャンのご家庭に何泊かしました。マウイ島にも日本人が住んでいるので、聖書のメッセージをするために出掛けました。イルカの絵とか描くクリスチャン・ラッセンはマウイ島出身で、彼の家など色々観光もしました。ある所に行ったら、モデルハウスのコテージ・小型の別荘があって、何とも言えず「ここハワイやわ〜」というような感じのこじやれた建物。ギター弾いて、本読んで、コーヒー飲んで、寝そべったら楽しいやろな〜。

何か書いてあります。“このコテージの材料は、全て島に漂着した廃材です。”つまり、ゴミで建てた。“1本何千万円！檜（ひのき）を！”そんなんじゃない。島なので、色んな所から木材が海岸に流れ着いて来る。椰子の木や難破した船の破片など色んな残骸が漂着している。その廃材を組み立てて、何ともこじやれた建物に仕上げているんです。

これを造った人、すごいなあと思いました。つまらない物を使って、めちゃくちゃ素晴らしい物を造っているからです。素晴らしい素材を使って素晴らしい物を完成させたら、それは材料が素晴らしかったからだ、という話になるかもしれませんね。材料そのものは廃材なのに、それを使って素晴らしい建物を造ったので、この大工さんの腕前はなんとすごいのか！と、栄光は造った人が受けることになるんです。

パウロはそのことを言っています。私の人生、ムチャクチャやん。でも、そのムチャクチャな人生を用いて神が良いことをなさるなら、素晴らしいのは私ではなくて神です。神様の素晴らしさは、私の愚かさを通して現されました。私の愚かさは、それだけを見ているなら私を弱くする。だけど、それはより良いもののために用いられると思う時、自分の過去を別の観点で眺めることを学びます。

私がこの上ない寛容を頂くことが出来たのは、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。これからも色んな罪人がイエス・キリストを信じることでしょう。信じる勇気が湧いて来ない人も出て来るでしょう。しかし、新約聖書という偉大な神の言葉を書くのに用いられたのは、完璧な人だったのではなく、かつて神を冒瀆する者・迫害する者・暴力をふるう者。

そんな人でも使徒として・新約聖書の作者として、こんなに偉大に用いてくださる方が祝福に満ちた神なら、私に対しても同じようにしてくださるのではないかと。

